

原著論文 (Article)

生涯を通じたキャリア形成の視点に立った アンコンシャス・バイアスへの気付き

Awareness of unconscious bias from a lifelong career development perspective

青木一起*

AOKI Kazuki*

Abstract

In recent years, unconscious bias has been attracting attention when considering the promotion of diversity. In order to address unconscious bias, which is said to unconsciously instill stereotyped values even in schools and other settings, and to enable children to think about their own life careers without being bound by stereotyped gender, age, role divisions, etc., we examined the current state of bias in schools and its impact on education and career. We discussed the current state of bias in schools and its impact on education and career development. We examined the current state of bias in school settings and its impact on education and career development. As a result, we considered that in order to reduce the influence of bias, the first step in solving the problem would be for children themselves to become aware of bias and acquire the correct knowledge. We then utilized the questionnaire "Implicit Association Test" (IAT) and lessons on bias to reveal that becoming aware of one's own biases can facilitate relationships and help one develop a positive attitude toward future career development.

キーワード：アンコンシャス・バイアス, 同調バイアス, キャリア教育

Key words : unconscious bias, tuning bias, career education

1. はじめに

近年、ダイバーシティ（多様性）推進への配慮から、偏見や差別を含む言動に対して企業のみならず、社会全体が非常に注意深くってきている。そのダイバーシティ分野において注目されているのが、アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）である。文科省（2019）においても、「次世代のライフプランニング教育の推進に関する有識者会議」設置要綱に、長期的かつ多様な視点に立ったライフプランニングの必要性を提唱する中で、特に、学校現場等のあらゆる場面において無意識に男女の役割に対する固定的な価値観を与えるとされる「無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）」に対し、子どもたちが自身のライフキャリアを固定的な性別役割分担意識にとらわれず考えられるようにするための教育プログラムの開発を依頼し、モデル校において試行・検証もされているところである。

いじめや不登校、発達障害など、学校においても課題が山積しているが、子どもたちが学校生活で、性別のみでなく、様々なアンコンシャス・バイアスへの気付きを高め、対応し、受容することで、誰もが気持ちよく、自分らしく活躍できるようになるのではないかと考えた。

そこで、本稿では、学校現場におけるバイアスの現状と教育、キャリア形成への影響について考えてみたい。

2. バイアスの視点からみた学校における課題意識

文部科学省「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は517,163件（前年度612,496件）であり、児童生徒1,000人当たりの認知件数は39.7件（前年度46.5件）である。藤川（2022）は、新型コロナウイルスによる学校や学級閉鎖の影響における減少とともに、コロナを原因とした偏見や差別に対して、学校を挙げて気を配るとともに、日々の健康観察の目は子どもたちの精神的な小さな変容に敏感に反応したのが影響しているとする。しかし、いじめの態様としては、依然「冷やかしいやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」がずっと最も多い数字を示している。森田（1986）は、いじめの4層構造を提唱し、いじめの持続や拡大には、いじめる生徒といじめられる生徒以外の「観衆」や「傍観者」の立場にいる児童生徒が大きく影響しているとする。「観衆」はいじめを積極的に是認し、「傍観者」はいじめを暗黙的に支持しいじ

* 椋山女学園大学教育学部 非常勤講師/名古屋学芸大学ヒューマンケア学部 特任教授

2022年11月8日受付

めを促進する役割を担っている。これには、認知バイアスの中の「同調バイアス」といった認知のゆがみや心理傾向が影響していると言われている。同調バイアスとは、自分自身の個人的な考えや判断とは違う場合でも、自分の周りにいる人々の多数派の意見に同調して、協調的な行動をとることによって集団の一員としての安心感を得ようとする心理傾向のことを意味する言葉である。例えば、一人一人の子どもたちは、相手に対して危害を加えたいといった大きな悪意をもっていない場合でも、自分の周りの子どもたちが特定の相手をターゲットとしてからかったり、ちょっかいを出したりしているのを見ているうちに、そうした周りの子どもたちやクラス全体の雰囲気に同調して、いじめのグループへと積極的に参加していってしまうことがあるというように、クラス全体でいじめがエスカレートしていってしまうようなケースなどにおいて多く見られる認知のゆがみのあり方である。「冷やかしかからかい」のいじめの背景にこの同調バイアスの影響があるかもしれない。そのような考えから、学校教育や教室における様々なバイアスに対する課題意識をもつに至ったのである。

3. 子どもたちの心と行動の理解

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックにより、ロックダウンをした欧米諸国に比べ、日本は感染者数・死者数とも格段に少なく、その理由の一つとして自主的なマスク着用やワクチン接種など「同調バイアス」（同調性の強さ）の影響が挙げられている。すなわち、日本人の調和・協調を重要視する日本社会の文化背景の影響が大きく、皆に同調する行動をすることが求められるためだとも考えられている。情報文化研究所（2021）によると、同調とは、「他者の行動や考え方に合わせる」のことを指し、無意識のうちに他者の行動や考え方を取り入れて同じようにふるまうことを同調バイアスまたは、同調圧力という。この同調バイアスは、一方で、先に述べたいじめや不登校などの原因となる面もあるのではないかと考えた。さらに、新型コロナウイルスの18歳未満のワクチン接種について、文科相が、「学校での集団接種は受ける人と受けない人の差別化につながり、いじめにつながることも心配される。希望する子どもは親の同意のもとで、個別接種を進めていく」と述べた。これも、文科相が同調バイアスを懸念した発言ともいえるのではないと思われる。学校現場における同調バイアスの影響は、いじめの加害者・被害者・傍観者の間にも働き、周りと同じようにしなければ自分がいじめられる、といった行動の中にもみられる。学校現場においてクラスやグループなど集団として活動するときには、何らかの集団規範が存在し、そこには無意識の同調バイアスが生まれるものである。これは大人の社会でも同じで、子どもたちがこのような同調バイアスを経験しながら

うまく適応していくすべを身に付けるのも学校という社会での重要な学びかもしれない。しかし、この同調バイアスが極端に苦手なのが、発達障害傾向の子どもたちであるともいえる。なぜならば、同調バイアスとは、現在の時点において自分の周りにいる人々と同じ行動をとろうとする集団心理によって引き起こされていくからである。ここに排他的な心理傾向が表面化すると、学級としての機能が危うくなっていってしまう。このように、子どもたちの心と行動の理解のためには、学校という社会や子ども同士の集団の中で働く目に見えない力＝同調バイアスを見抜く能力も身に付けることが必要なかもしれない。

4. 子どもの世界にもあるアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）

バク・スックチャ（2021）によると、アンコンシャス・バイアス「無意識の偏見」とは、自分自身が気付かずに（無意識に）もっている偏った見方や考え方（偏見）のことであると同時に、無意識に生じる「瞬間的、自動的連想」であるという。また、バイアスには、見た目や性別、人種、血液型、出身のみならず、「男だから安定した職業を……、女だからそんなに勉強しなくても……、若いからリーダーは務まらない……、学歴がないからいい仕事につけない……、」など、自分自身に対してもバイアスをかけてしまいネガティブな思い込みによって自分の可能性を潰してしまっただけでなく、自分らしく生きることはできないと警告する。このように、バイアスは他人に向けられることのみでなく、自分へのバイアスがキャリア形成に影響することを示唆しているのである。また、北村（2021）は、「銀行員は真面目で堅い」「女性とは子どもを産むもの」「男性らしさ」等など、多くの人に浸透している「ステレオタイプ」（型にはまった固定的なイメージ）こそが、バイアス（歪み）、つまり、何かに対して正しく認識されていないことであるとしている。

これらのことは、内閣府男女共同参画局（2021）による令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査結果（概要）によっても表れている。それによると、「女性には女性らしい感性があるものだ」「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」と性別に基づく役割や思い込みをしている日本人が男女とも5割前後と高い割合になっている。また、「食事のお金は男性が負担すべき」「女性は感情的になりやすい」等の結果からは、異性よりも男性・女性自身が無意識の位置に自身で（異性より）強く思い込んでいることもある。さらに、家庭・コミュニティシーンでは、男性の方が仕事と家事の分担に関して、性別役割意識が強く、職場シーンでは、男女とも1位の「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきではない」との意識が強いことも示している。このような性別に基づく役割や思い込みを決めつけら

れた経験について「直接言ったり、言動や態度から感じさせられたりした」人として、男性では「父親」「男性の知人・友人」が、女性では「配偶者・パートナー」が多い。また、職場シーンにおいては、男女とも「男性の職場の上司」が多い。これは、メディアで見たり聞いたりした東京オリンピック関連での「女性は感情的になりやすい」「女性は論理的に考えられない」という発言からもうかがい知れる。

このように、近年、日本でのアンコンシャス・バイアスへの関心は、まず、ジェンダーの視点から高まってきた。共同参画広報誌（2021）に発表された、世界経済フォーラムの公表によって、各国における男女格差を測るジェンダーギャップ指数2021年の日本の総合スコアは0.656、順位は156か国中120位であり、先進国の中で最低レベル、アジア諸国の中で韓国や中国、ASEAN 諸国より低い結果となったことが影響している。さらに、日本は、「経済」及び「政治」における順位が低くなっており、「経済」の順位は156か国中117位、「政治」の順位は156か国中147位（前回は144位）となっている。各国がジェンダー平等に向けた努力を加速している中で日本が遅れを取っていることから、男女共同参画の視点を中心に高まってきたのではないかと思われる。

しかし、守屋（2019）は、ジェンダー以外にも、職場の人間関係や仕事に影響する代表的なアンコンシャス・バイアスとして、人の属性や一部の特性をもとに先入観や固定概念で決めつけてしまう「ステレオタイプバイアス」や自分に都合の言い情報ばかりに目がいってしまう「確認バイアス」など8つのバイアスと、キャリアや成長に影響する代表的なアンコンシャス・バイアスとして、等身大の自分を隠して過大評価してしまう「ダニング・クルーガー効果」や、逆に、能力があるにもかかわらず自分を過小評価してしまう「インボスター症候群」など、7つのバイアスを具体的に例示した。そうすることで、自己認知力（自分のバイアスに気づき周りにどんな影響を与えているか自覚すること）を高めることの大切さを強調したのである。このように、家庭や、職場や、地域社会などで生まれている様々な社会問題には、アンコンシャス・バイアスがひそんでいると思われる。アンコンシャス・バイアスは誰にでもあって、あること自体が問題というわけではなく、過去の経験や、見聞きしたことに影響を受けて、自然に培われていくため、アンコンシャス・バイアスそのものに良し悪しはない。しかし、アンコンシャス・バイアスに気付かずにいると、そこから生まれた言動が、知らず知らずのうちに、相手を傷つけたり、自らのキャリアに影響をおよぼしたり、自分自身の可能性を狭めてしまう等、様々な影響があるため、注意が必要である。

このようなことは、大人の社会のみならず、学校教育の現場においても例外ではない。なぜならば、同世代、同じような価値観をもつ子どもたちが集まる学校は、よりアンコンシャス・バイアスが生じやすい場所であるからである。学校

や学級の集団内にいると自己防衛意識が強まり、様々なバイアスを生む。また、無意識の思い込みが原因となり、居心地の悪さを感じてしまう子どももいるだろう。また、学校における疎外感や孤立感が増加したり、アンコンシャス・バイアスがいじめや差別のきっかけになったりするケースもある。子どもたちの間でも、大人や社会の影響によって、性別、学校、血液型、職業などで、「□□の人はみんな○○だ」と思い込むことや、「私は大丈夫だ」「○○に違いない」と思い込むこと、さらには、周りに合わせてしまうこと、「私なんかどうせ無理」と思い込むことなどがある。無意識の偏見がもたらす問題は「自分には偏見が無い」と思うことから発生するともいわれる。では、このバイアスの影響を少なくするためにはどうしたらいいのであろうか。そのためには、子どもたち自身が自分の中にある偏見に気づき、正しい知識を身に付けることが問題解決の第一歩になるのかもしれないと考えた。

5. 自分自身の偏見に気付くための「潜在的連合テスト」(Implicit Association Test)

個人の偏見レベルを測定するテストに Implicit Association Test (IAT) がある。このような人間の潜在的な態度は、既に認知心理学の分野においてはジェンダーのみならず、人々の様々な潜在的にある偏見について研究されてきているが、従来、質問紙尺度によって測ることは難しいとされていた。そこで、差別や偏見に対して認知科学の枠組みからアプローチしてきたワシントン大学、ハーバード大学、バージニア大学の研究者（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）によって潜在的連想テスト (Implicit Association Test: IAT) が開発された。IAT テストとは、意識できない思考や感情の根源を探る手段として開発され、web 上で、潜在的な態度や信念を測定し、「肌の色」「セクシャリティ」「ジェンダー」「年齢」「国家」「人種」「体重」等の項目について分析をしているテストであり、現在でも web 上で世界中からデータを収集している。IAT テストでは、2つの属性のターゲットに対する異なる連想を測り、計測データとして示すことができるとする。すなわち、「無意識バイアスを測りたい対象の言葉」と「ある属性の特徴についての言葉」の間の連想を測るのである。例えば、「黒人」-「白人」の IAT では、ヨーロッパにルーツをもつ人の顔とアフリカにルーツをもつ人の顔を区別する能力を必要とするが、大部分のアメリカ人が、黒人よりも白人に対して自動的選好をもっていることが示された。また、肌の色のテストでは、暗い肌の色に対してよりも明るい肌の色に対する自動的な選好が明らかになり、セクシャリティでは、同性愛者に対するよりも異性愛者に対する自動的な選好が明らかになった。また、ジェンダーテストでは、たいていの場合、人文学と女性、科学と男性との結びつきがあることも示されていた。そこで、著者の勤務する大学生を対象に質問紙法によ

りバイアスチェックとアンコンシャス・バイアスの基礎的な知識を講義した後、自分の中にある具体的なバイアスの例と今後のキャリアとの関わりについてアンケートを実施した。

6. 質問紙「潜在的連合テスト」(IAT) を用いたアンコンシャス・バイアスへの気づき

安西 (2022) は、教育の未来を見据え、膨大な情報に幻惑されて誤情報や偽情報を鵜呑みにしてしまうことのないようにするためにも、教師自身が認知バイアスについて理解し、その克服方法を学ぶとともに、児童、生徒、学生の認知バイアス脱却のスキル、とりわけ情報を鵜呑みにしないためのスキルの教授法を開発し普及していくことが重要であるとしている。

そこで、教員をめざす大学1年生(35名 男子5名・女子30名)を対象にバイアスチェックを実施して、認知バイアスの理解と脱却のスキルを思考させた。バイアスチェックは、各所から様々な種類や項目があるが、北村(2021)のチェックリストを参考にジェンダー・年齢・職業などについて、「単身赴任中と聞くと、父親が単身赴任中だと思う。男性は基本的に家事が苦手だ。障害者は簡単な仕事しかできない。シニアはパソコンが苦手。お酒が飲めない社員は付き合いが悪いと思う。」などの10項目についてアンケートを実施した。その結果、学生は、10項目のうち5項目以上25%、3～4項目48%、1～2項目17%「そう思う」と回答した。その後、IATの質問紙で、自然科学や人文科学と人物についてランダムに並べられた単語からイメージする性別についても測定した。その結果、理数系や自然科学系の分野は男性をイメージして、文学系や人文系の単語からは女性をイメージする傾向にあるとの回答が多く表出した。その結果をメタ認知することで、学生たちは、自分の中にも無意識の偏見があることに気付くことができた。そして、バイアスには様々なタイプがあることについて理解した後、具体的なバイアスを例示するとともに、今後の自分のキャリアのためにどのように脱却に向けて意識していきたいかを聞いた。(以下、学生の記述から一部抜粋)

*自分の中にある具体的なバイアスの例

- ・血液型で人の性格をみてしまう
- ・災害が起きても自分は大丈夫
- ・重いものをもつのは男性、髪の毛が短いのは男性、運転は男性が当たり前
- ・落ち込んでる友だちは励まさないといけない
- ・眼鏡にタオルはオタク、坊主は野球部、サッカーは派手目、卓球部は地味
- ・ピアスたくさん空いているのはメンヘラ、ヤンキー
- ・治安の悪いところで危ないのは女性、女性は虫が苦手、女性は字がきれいであるべき
- ・本を読んでいる人はまじめ

- ・難しいことがあると自分には無理だと思う
- ・タトゥーを入れた人は反社会的 等々

*アンコンシャス・バイアスと自分のキャリアとの関わり

- ・そんな風にみられていたらどうしようと考えこまないようにする
- ・自分で教師に向いていないとか、私は～だからと決めつけないようにする
- ・障害のある子どもにこの子には難しそうだというバイアスが可能性を潰す
- ・児童に対して「あの子は～だから～だ」と考えないようにプラスにイメージする
- ・金髪の保護者は怖いと身構えないようにしていく
- ・自分の考えや価値観を子どもに押し付けないようにしたい 等々

*講義後の振り返り

- ・無意識のうちに思っていたことが偏見だったなあと改めて考えた
- ・自分の思い込みによる発言によって相手を傷つけてしまう可能性は充分あるので、常に意識していこうと思った
- ・自分の偏見が当たり前と思すぎて偏見に気付いていないことがたくさんある
- ・社会に出る前に自分の中にあるバイアスを1つでも減らす努力をしていく
- ・人生に不安をもって泣いていた幼い頃の自分を思い起こさせた
- ・自分がどれくらい偏見をもっていたかを見つめなおすことができた
- ・人に対しても自分に対しても偏見が多いと自分の成長の機会を失ったり新しいアイデアが生まれなかったりしてもったいないことになるから偏見をなくしていきたい 等々

上記のように、大学生においても無意識の偏見をもっていることに気づき、自分のキャリアを見据えた意識の変革を促す上で一定の効果は得られたかもしれない。しかし、学生からは「もっと早い段階からアンコンシャス・バイアスについて理解した方が良い」との意見も多く表出した。そこで、偏見が少ないであろう小学生においても調査を試みることにした。

7. 小学校におけるアンコンシャス・バイアスの授業

文科省(2019)は「次世代のライフプランニング教育の推進に関する有識者会議」設置要綱において、若者が男女共同参画の視点に立って、自らの将来の職業や様々なライフイベント、社会において果たす役割等を含めたライフキャリアについて考える機会を充実させることを検討し、子どもたちの価値観に影響を与えうる「無意識の偏見(アンコンシャス・バイアス)」等に関する具体的事例や研修例等について検証を行っている。守屋(2019)はその一環として、全国の小・中学校の子どもたちを対象とした「アンコンシャス・バイアス授業」のプログラムを開発し、2021年より、全国の小・中学校で、アンコンシャス・バイアス授業を提供している。

そこで、アンコンシャス・バイアス研究所の授業を参考に、名古屋市内の小学校3年生(27名)に協力を得て、子どもたちが無意識にもっているアンコンシャス・バイアスに気付かせ、今後の行動を考えさせていく授業の実践を依頼した。

授業では、導入において、3つの設定(①「交通きどうたいの白パイタいいんじゅんさちょうです。いはんした人をたいほしています。」②「14歳からボクシングをはじめ17歳でプロになりWBCの世界王者を4回とりました。」③「子どもは8歳と4歳の育ちざかり。育休しゅとく後、今はフリーランス。ぜっさん子育てちゅう!」)を提示し、「どんな人か思い浮かべますか」と問いかけた。その結果、学級の85%以上の子どもたちが自分の想像と違う人物であったとの回答であった。そのギャップから、それがアンコンシャス・バイアスという無意識の思い込みであるということを知らせた。さらに、バイアスには、性別、学校、血液型、職業などで、「□□の人はみんな○○だ」や、「私は大丈夫だ」「○○に違いない」と思い込むこと、さらには、周りに合わせてしまうことや「私なんかどうせ無理」と思い込みがあることを学んだ。その上で、自分にも無意識の思い込みがないか想起させ、今後どうしていききたいかをふり返らせた。(以下、小学校3年生の記述から一部抜粋)

*自分の身にまわりにある「アンコンシャス・バイアス」をみつけてみよう。

- ・女の子は赤かピンクのランドセル
- ・虫はかせは男の子
- ・男の子は授業中うるさい
- ・おとうさんがローンを払う
- ・家事をするのは女の人
- ・ゲームをする人はめが悪い
- ・本が好きなのはまじめ
- ・お金持ちはしあわせ
- ・社長は男の人、店長は女の人
- ・あばあちゃんはよく振り込み詐欺にあう
- ・女の子だから〜とよくいわれる
- ・どうせじぶんなんかできないとよく思う
- ・自分は文章が苦手 等々

*どんな感想をもちましたか。これからどうしていききたいですか。

- ・世の中にはきめつけてしまっていることがたくさんあるんだなあと思いました。これからは、〜と決めつけずにトライしていきたいです
- ・勝手に想像して、性別や見た目ですべて判断してはいけないと思いました
- ・A型でもマイペースな人がいるので決めつけるのはよくないと思いました
- ・アンコンとは差別みたいでいいこととはかけはなれていて気付くことが大切だと思った
- ・人間は必ず○○だとか、本当でないことや本当のことを嘘だと思い込んでいることが分かったので、これからはアンコンにならないようにしていきたいです 等々

9歳の子どもたちなりに「アンコンは直していった方がいい」という意見や「偏見ではなく事実なんだからあっていい」とか「差別とアンコンはどう違うのか」という疑問を呈した子どももいた。さらには、「なぜアンコンを無意識にもってしまうのか調べてみたい」という探究心を抱いた子どももいた。実践に協力していただいた担任からも「普段、思っても言っただけでいいものとして隠していたことをこの授業ではさらけだしていてもいいという感覚をもてたようで、とても楽しい雰囲気での授業ができた。授業参観の時などに保護者と一緒にやってみるとよい授業なのではないか」との感想を得た。このように、小学生においてもバイアスへの理解が気づきにつながり、考えて行動化させることによって、いじめや人間関係や学級経営にもいい影響を及ぼすかもしれないとの期待がもてる。アンコンシャス・バイアスに気付くことで友達が増える、差別やいじめがなくなる、みんな仲良くなれるといったメリットがあることに気づきをもたせることも涵養であろう。また、学習面においても思い込みや先入観で判断するのではなく、正確にとらえていこうとする意識が高まれば、自己調整の上で進める学習もより意味のあるものとなる。そのためにも、子どもたちに大きな影響力をもっている教師(担任)がアンコンシャス・バイアスを「知る」「気づく」「対処する」ことで人間関係力の向上を各学級において目指してほしいと痛感した。

8. 考察とまとめ

M・R・バナージ、A・G・グリーンワルド(2015)によると、バイアスは様々なマインド・バグによって引き起こされていると分析する。マインド・バグとは、人間が物事を知覚し、記憶し、推論し、判断する際に誤りを犯す、私たちに染みついた思考の習慣のことである。様々な錯視も、無意識的推論の視覚的なマインド・バグであるとしている。同様に、単語の並び方で偽りの記憶を無意識に作り出すこともある。また、社会的なマインド・バグは、人種や年齢、ジェンダー、宗教、社会的階級、性的関心、障害、身体的魅力、職業、パーソナリティなどの行動に影響があるとする。しかし、様々なバイアスを作り出すマインド・バグは、解消することができるとする。例えば有名なオーケストラのオーディションをカーテン越しのブラインド・オーディションにしたことで、「巨匠=男性」というステレオタイプのバイアスによって20%以下だった女性の団員を二倍以上の40%に引き上げたことができたとの例がある。このように、布一枚のようなささやかな形の介入を繰り返して適用していくことでマインド・バグを解消できる有効な道筋になるのではないかとしているのである。このように考えると、マインド・バグは、会社組織や学校においても評価する側や教師自身が影響されないように留意すべき点が多くあるのではないかと考えた。

人と関わる際は外見や属性などを通して見るのではなく、個々の違いを特徴として捉え、差異を認めることを意識することが望ましいことは理解している。それでもやはり、自分の言動が相手を傷つけてしまうかもしれないと日々感じる。なぜかという、自分では気付けない無意識の「思い込みや偏見」があるからである。何の悪気もなく伝えた言葉がきっかけで相手を傷つけてしまう、もしくは傷つけてしまったのではないかと、もやっとする経験は誰にでもあるのではないか。日常にあふれていて、誰にでもあるアンコンシャス・バイアスに気付かずにいると、前述したように同調バイアスによるいじめに発展してしまったり、それによる「判断」や「言動」が、相手を傷つけてしまったりする可能性もある。また、自分自身の可能性を狭めてしまったり、イノベーションの芽をつんでしまったりといったように、ネガティブな影響をおよぼすこともある。しかし、自分が努力することや関わることで変えていけるという信念（思い込み）で意欲を奮い立たせることもできる（青木 2022）ため、思い込みがすべていけないわけでもない。

学校現場において、このようなバイアスの影響を少なくするためには、授業において、アンコンシャス・バイアスを学ぶことが有効であろう。そうすることで、子どもたち自身が偏見に気づき、正しい知識を身に付けることができる。そして、自分のことに気付こうとする心のもちようが相手の気づきを深める問題解決の第一歩になるのかもしれない。さらに、学齢によっては、質問紙の「潜在的連合テスト」(IAT)を活用して、自分の中にあるバイアスに客観的に気付かせることも効果的であることが分かった。このように、脳がストレスを回避しようとする自己防衛から、受容の心を意識することによって、人間関係を円滑にしたり、自分の将来のキャリア形成についても前向きになれたりするのである。だからこそ、学校教育においては、集団での活動を基本とするという教育形態の特性を踏まえ、児童生徒に自己理解を深め、他者と関わる力を身に付けさせるための意識的な取り組みがこれまで以上に求められていると考える。

引用文献

- 青木一起 (2022) 「非認知能力の視点から考察した情報通信技術と「個別最適な学び」」。 椋山女学園大学教育学部研究紀要, 15 : 152-153.
- 安西祐一郎 (2022) 「教育の未来」, 中公新書ラクレ, pp. 276-284.
- アンソニー・グリーンワルド (2018) 「組織を蝕む無意識のバイアス」, リクルートワークス研究所 works, 150 : 7-8.
- 北村英哉 (2021) 「あなたにもある無意識の偏見アンコンシャス・バイアス」, KAWADE 夢新書, pp. 16, 76-80.
- 情報文化研究所 (2021) 「認知バイアス辞典」, 高橋昌一郎 (監修), フォレスト, pp. 242-243.
- M・R・バナージ, A・G・グリーンワルド (2015) 「心の中のブラインド・スポット—善良な人々に潜む無意識のバイアス—」, 北大路書房, pp. 23-25, 223-229.
- パク・スックチャ (2021) 「アンコンシャス・バイアス—無意識の偏見—とは何か」, 株式会社 ICE, pp. 6-7, 82-83.
- 内閣府男女共同参画局 (2021) 「令和3年度 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査結果 (概要)」, https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html
- 内閣府男女共同参画局 (2021) 広報誌『共同参画』5月号, p. 8, <https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2021/202105/pdf/202105.pdf>
- 藤川彰 (2022) 「クライシスは「蘇生」のとき」, 図書文化社, 指導と評価, 9月号, 814 : 51-52.
- 森田洋司・清水賢二 (1986) 「「いじめ」教室の病い」, 金子書房, pp. 11-12.
- 守屋智敬 (2019) 「アンコンシャス・バイアスマネジメント」, かんき出版, pp. 20-29.
- 一般社団法人 アンコンシャス・バイアス研究所 <https://www.unconsciousbias-lab.org/>
- 文科省 (2019) 「次世代のライフプランニング教育の推進に関する有識者会議について」, https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/kyoudou/detail/1422855.htm